

広島県におけるがんの罹患数(がんにかかる人の数)は年間2万人程度であり、また、年間の死亡者全体の3割弱にあたる約8200人が「がん」で亡くなっています。

広島県がん対策推進計画で目標に掲げた「がんで死亡する県民の減少」に向けては、まず第一に、がんになら

がん検診の受診を積極的に推進 早期発見により治る確率アップ

みんなで取り組む
広島県の
「がん」
対策

② 予防と検診①

「がん」で亡くなる人は、年間約8200人です。がんは早期発見すれば、治る確率が非常に高くなります。早期発見の場合と進行後発見の場合の5年相対生存率を見ると、胃がんでは97.1%に対し7.6%、肺がんでは81.1%に対し5.2%、結腸がんでは99.7%に対し15.5%、直腸がんでは98.2%に対し17.2%、乳がんでは99.4%に対し33.6%、子宮頸がんでは92.5%に対し23.4%の差があります。

次の段階の2次予防としての対策が「がん検診」です。がんは早期発見すれば、治る確率が非常に高くなります。早期発見の場合と進行後発見の場合の5年相対生存率を見ると、胃がんでは97.1%に対し7.6%、肺がんでは81.1%に対し5.2%、結腸がんでは99.7%に対し15.5%、直腸がんでは98.2%に対し17.2%、乳がんでは99.4%に対し33.6%、子宮頸がんでは92.5%に対し23.4%の差があります。

いための「がん予防」の取り組みが重要です。広島県では、がん予防対策として、喫煙をやめたい人への禁煙支援、受動喫煙の防止、良好な生活習慣の実現に向けた普及啓発、肝炎ウイルス検査の促進等の感染症対策などに取り組んでいます。がんは誰でも罹患する可能性がある病気ですが、喫煙、飲酒、食生活、運動などの生活習慣を改善することで、ある程度は予防することができます。自分自身をがんから守るためにも、がんにならない生活習慣を身につけるよう心掛けましょう。

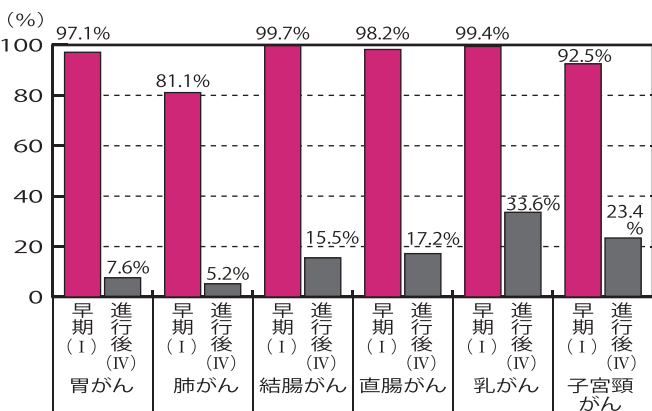


図 早期発見がんと進行後発見がんの5年相対生存率

〔公益財団法人がん研究振興財団 がんの統計2013〕

5年相対生存率とは、あるがんと診断された場合に、治療でどのくらい生命を救えるかを示す指標。あるがんと診断された人のうち5年後に生存している人の割合が、日本人全体で5年後に生存している人の割合に比べてどのくらい低いかで表す。

広島県では、がんの早期発見につながるよう、がん検診への関心を高める普及啓発や、対象者に応じた受診勧奨の促進など、検診受診率向上に向けた取り組みを進めています。

次回はその具体的な取り組みについてご紹介いたします。
(広島県健康福祉局 がん対策課)

【がんを防ぐための新12か条】

〔公益財団法人がん研究振興財団〕

1 たばこは吸わない	7 適度に運動
2 他人のたばこの煙をできるだけ避ける	8 適切な体重維持
3 お酒はほどほどに	9 ウイルスや細菌の感染予防と治療
4 バランスのとれた食生活を	10 定期的ながん検診を
5 塩辛い食品は控えめに	11 身体の異常に気がついたら、すぐに受診を
6 野菜や果物は豊富に	12 正しいがん情報でがんを知ることから

につなげることも不可欠です。

公衛協
ア・ラ・モーネ

⑯廿日市市宮島公衛協 【あらゆる主体と海岸清掃】

廿日市市宮島公衛協では、観光地という地域特性から、「海と川の清掃」と題し、環境保全美化活動に力を入れている。この活動は地域住民はもちろん、島外のボランティア団体や企業などと一緒に実施していることが大きなポイント。



包ヶ浦海岸は、厳島神社とは反対の方向に位置している。今回は、6月8日に開催された包ヶ浦海岸清掃について紹介する。

人が利用している。しかし、太田川放水路の正面に位置するため、大雨の後は、たくさんのごみが浜に押し寄せる。この度の清掃活動は、宮島公衛協と島内で活動するNPO団体などが企画主催した事業で、廿日市市域や広島市域の住民、地元企業など約170名が参加し、1時間30分の海岸清掃に汗を流した。集まったごみ

あらゆる主体の協力で環境保全 みんなで守る瀬戸の海

で最も多かったのは、カキ養殖に利用するプラスチックのパイプ182キログラム。また、厄介なごみは、フロッツの発泡スチロールが砕けた小さな破片で16キログラム。カンやビ

今後、さまざまな主体と連携して展開する地域活動の継続や協働に期待したい。
(地域活動支援センター)

宮島公衛協の中井勝子会長は「皆さんのご協力で、島の環境を守ることができ。みんなで今の環境を守り、この島の環境や文化を楽しんでいただきたい。」とまとめた。

今回から、前回お話しした「世界の科学者の大半で一致した考えをまとめた」IPCC第5次報告書の中身について触れていきます。

はじめに、最近100年間の気温変化の調査結果です。

地域的な変化傾向の

データが十分揃う期間(1901～2012年)では、ほぼ地球全体で地上気温が上昇しており、世界平均地上気温は、1880～2012年の期間に、0.85℃上昇しているとまとめられています。

IPCCでは「気候システムの温暖化には疑う余地がない。」という強い表現を使っています。これは世界中の科学者たちが、データ解析の結果、地球温暖化が進行しているという結論に自信をもって

いることを表現した結果です。「ここ数年、夏が暑いのがニュースで取り上げられるから、温暖化しているという話わかるが、冷夏もあったじゃないか!」とい



② 気温の長期的変化

100年規模の変化を問題視 世界平均地上温度が0.85度上昇

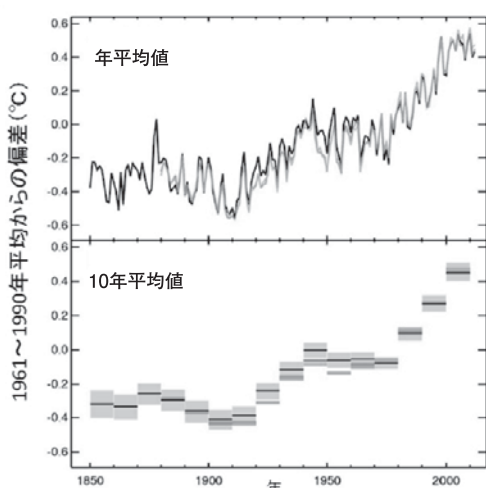


図 3つの地上気温観測データセットによる世界平均気温
〔1961～1990年平均を基準とした偏差で表示〕
(上図は年平均値、下図は10年平均値を表示)

し、この上昇の原因が二酸化炭素などの温室効果ガスにあると考えているのです。

今回は、この温室効果ガスと地球温暖化との関係について述べている部分を、IPCC第5次報告書から見ていきます。
(広島県地方気象台 観測予報課 岡崎賢治)